**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第９７回　（２０２３年９月１９日）**

**・勉強範囲：「第四章　在家の人への助言」４８頁**

**～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～**

（前回の補足）**📖４８頁上段　５行目**

**師「神は、この肉眼で見ることはできない。霊性の修行をしているうちに、人は『愛の目』、『愛の耳』、およびその他の器官をそなえた『愛の身体』を得る。人は神を、それらの『愛の目』で見る。神の声をそれらの『愛の耳』できく。人は愛でできた生殖器さえも得るのだ」**

**これをきいてMはふき出した。師は腹も立てずにおつづけになった、「この『愛の身体』で、魂は神と交わるのだ」**

「特別な目」が備わると神を見ることができる、という話をしましたね。ですが『ラーマクリシュナの福音』の別の箇所には「人が人を見るように、人は神を見ることができる」と書いてあります。神は、肉体の目で見、耳で聞くこともできるのです。

ですが神聖な人の肉体は、普通の人のものとちょっと違います。前回、プレーマーナンダジーの例を引用しましたが、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダも同様でした。

インドを遍歴中のヴィヴェーカーナンダはアメリカのシカゴで世界宗教会議が開催されることなど知りませんでした。一方、ブラーフモー・サマージのリーダーは、ヒンドゥ教について話す者がいないのならスワーミー・ヴィヴェーカーナンダにぜひ行って欲しいと思っていました。また南インドの信者たちはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダという偉大な僧侶をヒンドゥ教の代表者として参加させるために寄付を募っていました。しかし行くには多大なお金がかかりますし、ヴィヴェーカーナンダ自身のやる気も必要です。当初ヴィヴェーカーナンダは混乱し、「私は行かない。寄付は皆さんに返してください」と言っていました。ですが、その時にはすでに肉体はなくなっていた師シュリー・ラーマクリシュナの考えを知りたいとも思いました。するとシュリー・ラーマクリシュナはあらわれ、「その宗教の国際会議はあなたのために私が用意しました。だから行って下さい」と言ったのです。「その会議は神が作った予定です。他の講話者は自分の宗教の偉大さを演説しますが、あなたは『ひとつひとつが悟りの道である』というヒンドゥ教の伝統を話してください」と。

現代の大きな問題の１つが「非調和」です。科学技術の進歩によって人と人の空間的距離は近くなりましたが、心の距離はまったくバラバラ、離れていっています。それをどのように解決すればよいのでしょうか──調和の哲学が必要です。ではその調和の哲学のベースは何かというと、ヴェーダーンタのエッセンスである「Ekam Sat Vipra Bahudha Vadanti」（真理は１つ。真理を悟る道はさまざまある）、それが調和の哲学の基礎です。それについて、ヴィヴェーカーナンダがシカゴ宗教会議で話をすれば、皆がその思想に沿って徐々に進んでいけるでしょう？　また実際に今、本当にそうなっているではありませんか？　その頃と比べて、自分の宗教だけが偉大で他の宗教は間違っていると言う人は少なくなりました。その考え方の始まりが、シカゴ宗教会議におけるスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの演説なのです。

私が言いたいことは、それはhuman plan（人間が計画したこと）ではなくDivine plan（神による計画）だったということです。会議の主催者はキリスト教徒たちで、それはキリスト教がいかに偉大かということを世界に知らしめるために計画されたものでした（聴衆は他の宗教のリーダーたちの話を聞いて、「やはりキリスト教が偉大だ」と考えるだろうと推測していたのです）──それがhuman planです。ですがDivine planは調和の哲学を広めることで、その適任者が、ヒンドゥ教の聖典の勉強だけでなく西洋の哲学も宗教もよく勉強した人、そしてそれだけでなく悟った人──たった一人だけいました──スワーミー・ヴィヴェーカーナンダでした。

ですがヴィヴェーカーナンダ自身はそのような会議に参加した経験はないし、何の目的で何を話したらよいかという混乱があったので、行きたいという気持ちにはなれませんでした。当時南インドに滞在していたのですが、その家の一室で夜にシュリー・ラーマクリシュナと議論になることもありました。それが幾晩も続いたので、家のあるじは「あなたの他に、誰か部屋にいるのですか？　私にはベンガル語はわからないので何を言っているかはわかりませんが、あなたが誰かと議論しているのは聞こえました」と尋ねたということです。そのように、本当に見、本当に聞くことはあるのです。

ですけれども私たちが「愛の目」「愛の耳」をはっきりと映像化して理解するのは少し難しいです。しかし私たちはここまでは理解できます、すべての宗教が「あなた、もっと清らかになってください」と言っているということは。なぜそう言っているのですか？　今の私たちは世俗的な状態です。そしてそのままだったら何も進むことはできないです。最初に必要なことが「きよらかになるための実践をしてください」、つまり、今の肉体や心の粗大的ラジャスタマスの状態をサットワという精妙な状態に変えてください、ということなのです。サットワ的身心になって自分の存在が精妙な状態にならなければ、精妙なもの──神は精妙なものより精妙です──は理解できません。下の3つのチャクラ（ムーラーダーラ、スワーディシュターナ、マニプラ）の飲食・生殖・排泄という肉体的なレベルから上がってアナーハタ・チャクラに入ると、精妙なものを理解できるようになるのです。

そうなるにはコントロールの実践が必要です。「きよらかになる」「純粋になる」という意味は「コントロールする」ということでしょう？　食事や飲み物のコントロール、肉欲のコントロール、睡眠のコントロール、すなわち抑制できなければならないのです。抑制できるようになると、徐々にアナーハタ・チャクラに上がります。粗大な状態から精妙な状態に上がります。神はたいへんに精妙なので、粗大な状態で粗大なレベルにいるかぎり理解することは無理ですから、コントロール（抑制する）という実践がたいへん大事になるのです。それをすべての宗教、すべての聖典が言っているのです。聖書には "Blessed are the pure in heart, for they shall see God." という有名な一節がありますが、それがpurity（純粋化）です。

あるとき信者がスワーミー・サーラダーナンダジーに言いました、「シュリー・ラーマクリシュナの直弟子であるあなたは、あなた自身が悟っただけでなく、人を悟らせる力もあるはずです」と。それに対してサーラダーナンダジーは「できますけれども２つの結果が出ます。1つはあなたの頭はおかしくなります、もう１つはあなたは死にます。どちらがよいですか？」と答えました。高電圧の電気が細い電線を流れると電線を燃やしてしまうでしょう？　高電圧の電気を通すには電線を強くしないとなりませんが、それが純粋化の実践なのです。それほどサマーディの経験は強烈なインパクトで、それに耐えうるほどに自分の準備をしておかなければならないのです。肉体も心も精妙になっていないと悟りのインパクトに耐えることはできません。悟りにハイジャンプ、ロングジャンプして行かずに、ゆっくりゆっくり準備を進めていくのはそのようなわけです。そして粗大から精妙になれば、神を見ることも聞くこともできるようになります。

**📖４８頁上段　後ろから６行目**

**ひどく酔っぱらった酒飲みは、『まさに、私はカーリーである！』と言う。愛に酔ったゴーピーたちは、『ほんとうに、私はクリシュナだ！』と叫んだ。**

**昼も夜も神を思っている人はいたるところに彼を見る。それはちょうど、人がしばらく一つの炎をじっと見つめていたあとで、四方八方に炎を見るのに似ている」**

**「しかしそれは、ほんとうの炎ではない」とMはふと思った。**

**（解説）**

**パラー・バクティ**

トリプティ（トライアングル）［板書：△］、つまりギャーナ・ヨーガにおける「実践者」「アートマン」「ブラフマン」の３つ、ラージャ・ヨーガにおける「瞑想者」「瞑想」「瞑想の対象」の３つ、バクティ・ヨーガにおける「バクタ」「バクティ」「バガヴァーン」の３つがトライアングルです。また「バクタ」をさらに具体的に「マザー・カーリーを信仰する者」とすると、「マザー・カーリーの信者」「マザー・カーリーの考え（マザー・カーリーの瞑想、マザー・カーリーの名）」「マザー・カーリー」の３つです。それが「私はマザー・カーリー」となると、３つが１つになって「マザー・カーリーだけ」になります。

それと同じようにゴーピーたちは「私はクリシュナ。クリシュナだけ」になったのです。集中が大変に深まると別々の存在がなくなり、思いを集中させている存在だけになるからです。それがサマーディです。パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』のとき、「瞑想する人」と「瞑想の対象」と「瞑想」が一つの存在になるのがニルヴィカルパ・サマーディサマーディであると、説明したでしょう？

同じように、ゴーピーたちはいつもクリシュナのことを考えているのでクリシュナ以外の考えが出てきません。すべての中に神を見、つねに神のことを考え、すべてのやり方が神とつながって為されると、そのとき神以外の別の存在はなくなります──それが信者の実践です。すべてのものの中に、すべての存在の中に、すべての生き物の中に神を見、すべての仕事は神の仕事として行い、外も神、中も神、左も神、右にも神、過去も神、未来も神、現在も神、家族全部が神──そのように神だけに集中して考えると、神以外何も見ることはできないではありませんか？　これは論理的です、なぜならすべての中に神だけを見ていますから。ゴーピーたちはすべての中にクリシュナを見、クリシュナ以外何もありません。ゴーピーたちの考えの中に、クリシュナ以外何もない。普通の仕事もクリシュナを喜ばせるため、クリシュナを食べさせるため飲ませるため、クリシュナを喜ばせるため、そのように自分の人生の中心はクリシュナだけです。その状態にもしも入ったら、そのとき「私はクリシュナです」という考えが自然に浮かぶのです。

これは、実践して経験しなければ理解できないことです。実践が必要です。すべてが神という実践を行えば、私たちと神のあいだの大きな障害である「自我」（＝私、私の）がなくなり、残るのは神だけ、神以外のものは何も残らなくなります。哲学の考えでは「自我（私意識）がなくなる」と表現しますが、その状態になると「私はクリシュナ」「私はカーリー」という考えが自然にあらわれます。トライアングルがなくなって１つになるのがパラー・バクティの状態です。

（トライアングルの）信者や瞑想者は自我のシンボルです。「私は瞑想している」という考えの源は自我だからです。それがなくなると「私」というアイディアもイメージがなくなり、からだや名前のイメージがなくなります。そのときたとえ「私は瞑想している」という言葉を使っても、「私」について、からだや心のイメージはなくなります。私たちは名前、形、仕事など、すべてにおいてそのイメージを持ちますけれども、パラー・バクティの状態の人の「私」は「神」と同じなのです。ですから「私はクリシュナ」「私はカーリー」と言ってもその「私」は自我ではないのです。

**📖４８頁下段　２行目**

**人の心の奥底の思いを読みとることのおできになるシュリー・ラーマクリシュナはおっしゃった、「人は霊そのもの、意識そのものである神を思ったために意識を失う、などということはない。シヴァナートがあるとき、あまり神のことを思いすぎると頭が混乱すると言った。そこで私は彼に言ったものだ、『人がどうして、意識を思いすぎて無意識になることなどがありえよう』と」**

（解説）

シヴァナートはブラーフモー・サマージの一員でした。ブラーフモー・サマージ設立の背景からお話しましょう。

当時のインドは日本の明治以前のように伝統的な社会でした。そこへ西洋人（たとえばイギリス人）が来て西洋の近代文明を持ち込んでインドの文化スタイルは変わっていきました。西洋はすでに、（昔のキリスト教のように）「ただ信じなさい」という考え方から、論理と議論によって正しい/正しくないや信じる/信じないを決める、科学中心の近代文化というものが始まっていました。王や天皇などによる絶対政権が崩壊し、民衆の意見を反映させて国の政治を行う民主主義も始まっていました。自由が制限された不平等な社会が、政治的にも経済的にも社会的にも宗教の上でもみな平等になりました。「自由」「平等」「民主主義」、それが近代文明の特徴です。それを掲げてヨーロッパ各国はよその国へ行き、その国を統治し、宗教を改宗させ、自分たちの文化を広めたのです。

アクションにはリアクションが付きものです。西洋文化が入ってきたとき、インドでは伝統的なものと新しいものの対立が起きました。「現代的なものはすべてダメ。昔のものがすべて素晴らしい」というグループと、「西洋のものは何でも素晴らしい」というグループの対立が起きたのです。前者は後者のやり方では国の力が弱まると主張し、インドの社会はとても混乱しました（インドの伝統では牛肉を食べませんしアルコールは飲みませんが、それらを飲んで食べる人が増えました。またヒンドゥイズムは神の形を信じますが、キリスト教は神には形がないとしています。そこでキリスト教に改宗したインド人が宗教的に奇妙な行動をとったりすることもありました）。

そこへ両者の良いところを合わせたグループが現れました。それがブラーフモー・サマージです。彼らは文化だけでなく宗教においても、伝統的なヒンドゥ教と西洋のやり方を合わせた思想を展開しました。当時のインド人はそれを好感を持って受け入れました。ですがその思想の中には「悟り」のことはあまりなく、ヒンドゥ教は論理に欠けた迷信の部分が多いという考え方でした。

しかしその考えに満足しない人たちもいます──シュリー・ラーマクリシュナの直弟子のほとんどはブラーフモー・サマージ出身でした。そこに身を置いてからシュリー・ラーマクリシュナの元へやって来ました──ブラーフモーに入り、ブラーフモーの実践に従っても、「神を悟りたい」という種類の人は心に「虚しさ」を抱くようになりました。なぜならブラーフモーに「純粋になる」「悟り」「人生の本当の目的は悟り」についての助言はなく、儀式的（ritualistic）なものを重んじていたからです（ブラーフモーは西洋のキリスト教の教会のやり方をフォローしていました。たとえばサンデー・チャーチ。日曜日の州かいで讃美歌を歌い神に祈りますが、そのときだけ霊的な人、他の日は世俗的な人、という感じです）。

それでは充分ではなく「神を本当に悟りたい」という人たちは、シュリー・ラーマクリシュナのことを聞くとシュリー・ラーマクリシュナの元へやってきました。最初、ケシャブ・チャンドラ・センが来て、新聞にシュリー・ラーマクリシュナのことを書き、コルカタの人たちの存在を知らせました。彼は、「私たちはヒンドゥ教にはよいものはあまりないと考えていたが、ラーマクリシュナ・パラマハンサに会ってその考えは間違っていたと理解した。ヒンドゥ教の中に素晴らしいものがあるし、素晴らしい人もいる」と書きました。

ブラーフモー・サマージの中でも仲たがいがあり、やがてブラーフモーは３つのグループに分かれました。創設当初からのグループはアーディ・ブラーフモー・サマージと名乗り、ケシャブ・チャンドラ・センの率いるグループは（インド・）ブラーフモー・サマージと名乗り、そのあと別の問題でケシャブのグループから分かれた、シャーダーロン・ブラーフモー・サマージの３つです。

ですから3つ目のグループのメンバーも、ケシャブがドッキネッショル寺院を訪問している頃からシュリー・ラーマクリシュナの元を訪れていました。ナレンドラナート（のちのスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）やラカル（のちのブラフマーナンダジー）はシャーダーロン・ブラーフモー・サマージのメンバーでしたが、そのリーダーが、シヴァナート・シャーストリーとプラタープ・チャンドラ・マジュンダールでした。彼らの名前は『ラーマクリシュナの福音』に何度も出てきますね。

シヴァナートもケシャブも何回もドッキネッショルに行きました。ケシャブとシュリー・ラーマクリシュナの関係はケシャブが亡くなるまで続きましたがシヴァナートは少し違いました。最初何度もドッキネッショルを訪れシュリー・ラーマクリシュナをとても尊敬していましたが、自分のグループの若者たちがドッキネッショルに行くようになると、グループの力が弱まることを懸念して徐々に行かなくなりました。あるときシュリー・ラーマクリシュナが「なぜ最近来ないのか」と聞くと、「シュリー・ラーマクリシュナはとても偉大な方ですが１つ問題があります。それはサマーディです」と答えました。シヴァナートの考えではサマーディは病気だったのです。神を考えすぎて頭がおかしくなる病気です──それが、この４８頁の本文の話です。その病気になると無意識になるとシヴァナートは言ったのです。

シヴァナートが来なくなったのはもう１つ理由があります。ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュです。ブラーフモー・サマージはとてもピューリタン的で道徳を重んじました。ですから当時は奔放でアルコール好きなギリシュを好きではなかったのです。ですがシュリー・ラーマクリシュナの言うことは、「道徳はもちろん必要であるが、最も大事なのは霊的になること」でしょう？　ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュはシュリー・ラーマクリシュナの信者になって、どれほど変化してセイントになったでしょうか！　ですがシヴァナートたちは彼の変化を見ずに、非道徳的な人だと決めつけて、彼が出入りしているドッキネッショル寺院に行かなくなったのです。

シュリー・ラーマクリシュナは神の化身（アヴァターラ）ですから、罪びとの中にも神を見、罪びとという区別をしません。イエスとメリーマグダレンや、ブッダとアンバパーリーやアングリマーラもうそうです。アングリマーラの物語は知っていますか？　多くの人を殺し、多くのものを盗んだアングリマーラでしたがブッダの影響で変化しました。アンバパーリーは売春婦で性格もよくありませんでしたが、彼女も変化しました。そのようなことはあるのです。

フリードリヒ・マックス・ミュラー［1823-1900。ドイツに生まれ、イギリスに帰化したインド学者（サンスクリット文献学者）、東洋学者、比較言語学者、比較宗教学者、仏教学者］のことは知っていますね。彼も『シュリー・ラーマクリシュナの生涯』を書きました。ではシュリー・ラーマクリシュナに興味を持ったきっかけは何かというと、それはケシャブでした。当時ケシャブはイギリスへ行って素晴らしい講演をし、偉大な講話者として有名でしたが、マックス・ミューラーはケシャブの変化を見て（ケシャブは最初、イエス・キリストが大好きでした。シュリー・ラーマクリシュナの影響で、マザー・カーリーとブラフマンを好きになりました）、何が彼を変えたのか興味を持ったのです。マックス・ミューラーは学者でしたから、変化の理由を知ってシュリー・ラーマクリシュナについて書き始めました。

あるときシャーダーロン・ブラーフモー・サマージのリーダーの一人、プラタール・チャンドラ・マジュンダルがマックス・ミューラーに挨拶に訪れたことがありました。そしてシュリー・ラーマクリシュナはとても偉大なレベルの聖者だが、出入りする人たちの中にギリシュ・チャンドラ・ゴーシュのような罪びとがいて、シュリー・ラーマクリシュナのレベルが下がっているという話をしました。マックス・ミューラーがそれを聞いたらシュリー・ラーマクリシュナを嫌悪すると思ったのです。ですが思惑は外れ、マックス・ミューラーは「それが神の化身のしるしである。私はシュリー・ラーマクリシュナが本当の神の化身だと分かった」と喜びました。

今は本文に戻りましょう。シヴァナートの言うことは、「神について考えすぎると頭がおかしくなる」です。西洋の一部の心理学者と哲学者にはそのような考えがあり、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダも当初そう考えることがありました。私はヴィヴェーカーナンダに起こった事を何回も思い出します──シュリー・ラーマクリシュナはナレンドラナートに会う前から、彼は7人のリシ（seven sages）の一人のナラ・リシであると知っていました。そしてシュリー・ラーマクリシュナのミッションを手伝うためにこの世にあらわれるということも知っていました。しかしナレンドラ自身は知りませんでした。最初にドッキネッショルに来たとき、ナレンドラはまだ学生で友人と共に来ました。その訪問の前、ある信者の家でナレンドラは賛歌を二つ歌っています。「マヌジャラヌニケタ……」（意味は、「神様、私はずっとあなたを待っています。ですが日にちは流れましたが、あなたまだあらわれていない。あなたのために、私はずっと待っています」）と、「マナーチャロー……」（意味は、「心よ、自分の場所に戻ってください」）でした。それを聞いてシュリー・ラーマクリシュナはラームチャンドラダッタに、「彼をドッキネッショルに連れてきてください」と言いました。それがナレンドラのドッキネッショル訪問のきっかけでした。来たあと、シュリー・ラーマクリシュナはナレンドラだけを別の部屋に連れていき、ドアを閉めると──これはのちにスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ自身が回想録に書いたことですが──突然、ナレンドラに向かって手を合わせ、「私はあなたがナラ・リシの化身だと知っています」と言いました。もちろんナレンドラにその気づきはありません。それで、この人の頭はおかしい、mad manだと考えました。mad manは日本語で何？

参加者「精神が錯乱している」

その種類の方だと考えました。そして「私がナラ・リシの化身？　私にはナレンドラナートという名前があり、私の父はヴィシュワナート、母はボーネシュワリで、コルカタに住み、大学で学ぶ学生である」と考えて、シュリー・ラーマクリシュナの偉大さを聞いたが彼は頭がまったくおかしいに違いない、という印象を持ったのです。ナラ・リシの化身だと言ったあと、シュリー・ラーマクリシュナは自分の部屋からいろいろなお菓子を持ってきてナレンドラに食べさせようとしました。ナレンドラは「私は自分ひとりで食べることはしない。友達にも食べさせてください」と言いましたが、シュリー・ラーマクリシュナは「最初はあなたが食べてください。あとで私が友達にあげますから」といっぱいお菓子を食べさせました。その後自分の部屋に戻ると、普通の偉大な聖者のように宗教の偉大な言葉を語り始めました。その様子をナレンドラは集中して見て、「さっきの経験は何だったのだろう？　今はまったくあのようではない」と感じ、考えた末、「うーん、頭がちょっとおかしいが、この方は本当は偉大な方で、霊的なレベルがとても高い」と結論づけました。シヴァナートも「神のことを思いすぎて頭がおかしい」と言ったでしょう？　ナレンドラは西洋の哲学などをよく勉強していました。神のことを考えすぎると頭がおかしくなるという説の存在も知っていました。それでそう結論づけたのです。

「次に来るときはひとりで来ると約束してください」と言われて、ナレンドラは次の訪問はひとりで行きました。友人と一緒のときはわかりませんでしたが、ドッキネッショルはとても遠いと理解しました。そして、シュリー・ラーマクリシュナがナレンドラを見ると圧倒されて、座っていた自分のからだを足で触れられるとすべてがまわってまわってまわってなくなりました、何もない。ナレンドラは自分がなくなるのかと思ってとても怖がって、「私に何をしましたか？　私には母も父もいます」と叫びました。死んだら家族が悲しむからです。シュリー・ラーマクリシュナはそれを聞くと大声で笑って、ふたたび触れるとすべてが元の状態へ戻りました。そのときナレンドラはさらに混乱しました。自分の意志の力には自信があったのに、その人の一触れですべてがなくなったからです。その日、シュリー・ラーマクリシュナは「また来ることを約束してください」と何回も頼み、ナレンドラは「わかりました、また来ます」と言って帰りました。

ヴィヴェーカーナンダも最初、ラーマクリシュナの頭はおかしいと思ったのです。「あなたがたびたび話しかけておられるマザー・カーリーは、あなたご自身の想像です」とシュリー・ラーマクリシュナに言うこともありました。それを聞くとシュリー・ラーマクリシュナは何も知らない小さな子供に対するように笑いました。ナレンドラはシュリー・ラーマクリシュナが言うことを幾つも反論していました。あるときシュリー・ラーマクリシュナが、「ナレン、あなたは以前、私の言うことは私の頭の中の想像だと言っていましたね。今はどう思いますか？」と尋ねると、「私はよくよくチェックしました。今は、あなたの言うことすべてが正しいことを理解しています」と答えました。

ですがシヴァナートにはそのチャンスがなかったでしょう？　シヴァナートとナレンドラの混乱は最初同じでしたが、ナレンドラにはテストする機会があったけれどもシヴァナートにはありませんでした。ナレンドラは、金銭に触れると手が曲がってしまうと言うシュリー・ラーマクリシュナの真偽をテストするために、黙ってベッドの下にコインを忍ばせてシュリー・ラーマクリシュナの反応をチェックしました。もちろんコインの存在など知らないシュリー・ラーマクリシュナでしたが、そのときはベッドに触れることもできませんでした。そのように試して、最終的に「シュリー・ラーマクリシュナのすべてのことは想像的ではなく正しい」とナレンドラは理解したのです。

ドッキネッショル寺院のある場所は少し田舎で、周囲の99.9％の人はシュリー・ラーマクリシュナを「mad priest」（マザー・カーリー寺院の、頭がとてもおかしい司祭）だと思っていました。神の化身だと思う人はほとんどいませんでした。英語にはmadとcrazyがあり、mad man が100%おかしい人、crazy manはそれほどではありません。日本語の辞書には何と書いてありますか？

参加者「マッドというのは病的な感じで、精神的な錯乱状態。クレージーというのは何かに夢中だというようなものもクレージーというので、まあちょっとおかしいというか、軽い感じです」

そうですね、mad manのしるしの１つは「心の病気」、もう１つが「一貫していない」、つまり考え方、仕事、行動、感情が、ある瞬間はこれ/次の瞬間にはあれ、というような状態、また「暴力」も１つの特徴です。

そして普通の人の普通の考えは、「快楽や財や名声や家族が人生の目的でそれが欲しい」と考え、そう思わない人は「頭がおかしい」と考えます。ですから出家僧はちょっとおかしいとか、結婚できるのに自らすすんで結婚しない人はちょっとおかしいとか、神を悟ることが人生の目的で、そのために家族を離れて実践する人はおかしいと考える人もいます。シュリー・ラーマクリシュナはガンジス川の土手に顔をこすりつけて血を流しながら、「マザー、日は流れているが、あなたはまだあらわれない」と大声で泣いていましたけれども、普通の人はそうしますか？　シュリー・ラーマクリシュナの大きな声を聞いて人々が周囲に集まりましたが、その様子を見て、「彼は頭がおかしくなった」と言いました。ベンガル語でパーガル「パーガル・バームン」（板書：Pāgal Bāmun）と言っていました。

ヴィッギャーナーナンダジーの若い頃、ドッキネッショル寺院に泊ったことがありました。家に戻ると母親は「頭がおかしいブラーミンの所に行ったのですか？　絶対に行かないでください。その頭がおかしいブラーミンの影響で、200人、300人の若者の頭がおかしくなっています。だから絶対に行かないで」と頼みました。それが、普通の人々の、シュリー・ラーマクリシュナについての印象でした。

それに対してシュリー・ラーマクリシュナは、いわゆる「普通の人」も頭がおかしいと言いました。「彼らは世俗的なものの関係で頭がおかしい。私は神の関係で頭がおかしい。２つの選択があります。あなたはどちらがよいですか？」と言いました。そして後にシヴァナートに、「神の意識によって宇宙は動いている。私はその神のことをいつも考えている。その意識は間違いですか？　あなたたちはいつも世俗的なもののことを考えている。あなたたちの頭はOKで私の頭がダメだということがありますか？」と言いました。

宇宙は神の意識で動いています。すべての意識の源は神です。その神のことをいつも考えている人の頭が本当は正しい。それに対して、世俗的なことをいつも考えている人の頭のほうが本当はおかしいのです。基準が正反対です──それがここのとても大事なポイントです。世俗的なものを考えることと神を考えることの結果は全く違う。そのように考えると、世界の99%の頭がおかしいです。神のことだけを考える人の頭が正しいです。基準がまったく違います。

**（賛歌奉献）**（映像データの１：５７：０２頃）

ラーマクリシュナナーム　カオロモアヴェラーム　ラーマクリシュナナーム　カオロモアヴェラーム

**（Q＆A）**

今日の話について質問ありますか？　「神のことを考える/考えない」が基準です。神のことを考えて、神の悟りが人生の目的と考える人の頭が本当は正しいです。反対に、世俗的な快楽が人生の目的と考える人の頭が本当は正しくないです。それがシュリー・ラーマクリシュナの言うことです。それが結論ですけれども、それの理解は簡単なことではないです。

私はラーマクリシュナ僧院の寄宿学校に行って１０歳の頃から『ラーマクリシュナの福音』を読んでいましたが、そのときは全然面白くなかったです。毎週日曜にあるお坊さんが『ラーマクリシュナの福音』の説明をするのですが、何も理解しませんでした。ただ、そのお坊さんがとても楽しんで読んでいることだけは理解しました。しかし日曜は休日ですし、私たちは『ラーマクリシュナの福音』の話を聞くよりも遊びたかった。ですけれども話を聞かないといけないので、「しょうがない」という気持ちでした。もちろんラーマクリシュナ僧院の大学でも『ラーマクリシュナの福音』を勉強する時間はありました。ですが人生の真の目的は神を悟ることであると本当に理解するまでには、結構時間がかかりました。「神の悟りが人生の目的」というのは、普通の人には全然分からないものなのです。なぜならお金を稼ぐ、名声を得る、家族を作る、それが皆にとっての普通のことだからです。ですからシュリー・ラーマクリシュナの言う事を本当に理解するのは、簡単ではないのです。それが分かる人は、前生から神聖な交わりや聖典を勉強してそれがサムスカーラになったなどの影響で可能なのです。それは普通のことではないです、絶対。とっても特別です。とってもとても特別です。日本で考えてください、何人の人が、本当に神様が好きですか？　またインド人も神様が好きですけれども、ほとんどは儀式的だったり、自分の願い事を叶えて欲しいからだったりします。神を悟りたいと考える人はインドでも少ないのです。そして私は言うのです、神の悟りが人生の目的とかアートマンの悟りが人生の目的という人は、神の恩寵によるものだと。皆さんが「神が好き」というのも、それは神の恩寵でできています、そのことは信じてください。その状態はもちろん最初の段階ですけれども、そこからだんだん進んでいけます。

シャンカラーチャーリヤも、人間に生まれたこと、神聖な交わり、解脱への渇望という３つは神の恩寵によるものだと言っていますね。それは、神の恩寵だけでしかなせないものなのです。普通はそれは、できないです。そのことを考えると私たちは本当にラッキーだと思います。ですが同じところに留まらず、先に進まなければなりません。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上